

大野城市の文化財

< 第 40 集 >
大野城市の民具③



2008

大野城市教育委員会

序

大野城市歴史資料展示室では、考古資料や民俗資料の収集保管、調査研究、展示活用に努めており、この一端を『大野城市の文化財』で紹介しています。第40集となる今回の発行では、市民の皆様からご寄贈いただきました民具が、歴史資料展示室で実施している出前講座、ふれあい歴史体験、企画展などで活用されている様子を紹介します。

出前講座では、社会科の授業で昔の暮らしについて学習する小学生が、直接民具に触れ、体験することで、当時の人々の生活の知恵や工夫を学んでいます。また、毎月開催しているふれあい歴史体験では、ガリ版や蓄音機、石臼などの体験を、幅広い年代の方に楽しんでいただいています。今年度開催した民具展では、平成17～19年度に寄贈された民具を中心に、道具の使い方や当時の生活の様子を復元し、道具の変遷を感じられるようにしました。今回はこのような活動の中で活躍する民具を紹介しています。本書をとおしまして歴史資料展示室の活動に興味を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、この編集にあたり民俗資料をご寄贈くださいました方々に、厚く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 古賀宮太

目次

はじめに	1
寄贈の受け付け	2
調査	3
活用	4
①ふれあい歴史体験	
ガリ版	5
蓄音機	8
石臼	10
②平成19年度民具展	
三面鏡	11
箆筒・柳行李	12
足踏みミシン・針箱	14
衣桁	16
乱籠	17
長襦袢	18
丹前	19
おわりに	20

はじめに

歴史資料展示室の民俗コーナーに展示されている様々な民具は、市民の方から寄贈されたものです。実際に明治・大正・昭和の中頃まで使用されていました。

そもそも「民具」とは何のことをさすのでしょうか。

「民具」は、人々の生活の中でその時代にあわせた必要な機能を備え、使い続けられてきた日常生活用具のことをいいます。私たちが使ってきた筆筒や茶碗、桶、甕などの生活用具や農具など、多くのものが含まれています。

かつて大野城市は純農村でした。米、麦、菜種などの農産物や、養蚕なども行なわれていました。（詳しくは『大野城市の文化財』第8集、第10集を参考にして下さい。）そのため今では使われなくなった多くの農具が寄贈されています。

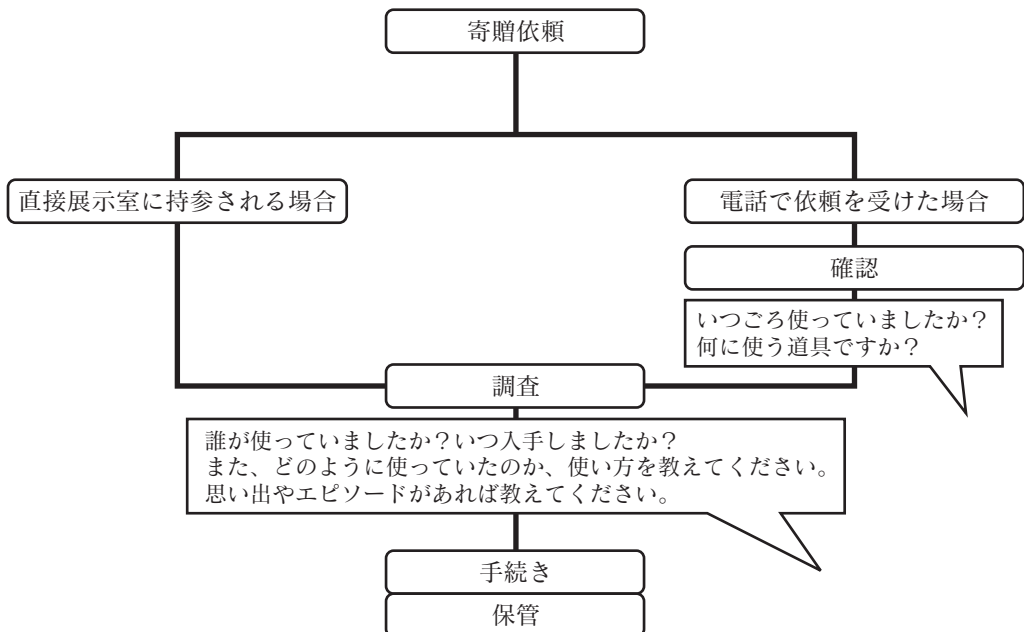


民俗資料の展示

寄贈の受け付け



寄贈依頼は、展示室の受付に直接持参される場合と、電話での問い合わせがあります。



調査

民俗資料収集記録簿			
<p>番号 収蔵番号 _____ 調査地番号 _____ 分類番号 _____ 整理番号 _____</p> <p>調査地 大野城市 _____</p> <p>立地 _____</p> <p>名称 (地方名)県内 _____ 旧郡内 _____ 市内 _____ (標準名)</p> <p>用途等 1 (1)衣 (2)食 (3)住 2 生産・生業 3 交通運輸通信 4 交易 5 社会生活 6 信仰 7 民俗知識 8 民俗芸能・娯楽等 9 人の一生 10 年中行事 使用目的(時・場合) _____ 使用方法 _____</p> <p>使用年代 _____</p> <p>使用者 職業 _____ (氏名) _____ 年齢 _____ 男・女 _____ 入手経路 購入 _____ 自家製 _____ その他 _____</p> <p>製作 製作年代 _____ 材 料 _____ 製作者 職業 _____ (氏名) _____ 年齢 _____ 男・女 _____ 製作方法 福む 組む 織る 縫う 刷る 曲げる その他 _____</p> <p>分 布 県下 _____ 旧郡下 _____ 市内のみ _____</p> <p>由来・変遷 由来伝説 _____</p> <p>変 遷 _____ 年前頃から _____ 年前頃まで使われていた。現在使われている。 禁忌・俗信 _____</p> <p>形態・寸法 _____</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 100px; margin-bottom: 10px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> 写 真 </div> <p>写真番号 _____ 撮影者 _____ 撮影年月日 _____</p> <p>備考(製作工程, 採集状況, 使用方法他) _____ _____ _____ _____ _____</p> <p>調査月日 _____年 _____月 _____日 入手月日 _____年 _____月 _____日</p> <p>談話者 職業 _____ 氏名 _____ 年齢 _____ 男・女 _____ 住所 _____</p> <p>入手方法 寄贈 _____ 購入 _____ その他() _____</p> <p>寄贈者 住所 _____ 氏名 _____</p> <p>調査者 所属 _____ 氏名 _____</p> <p>採集者 所属 _____ 氏名 _____</p> <p style="text-align: right; font-size: 0.8em;">大野城市教育委員会</p>		

上の表は、寄贈資料について記録する「民俗資料収集記録簿」です。

寄贈者に聞いた話をもとに、情報を記入します。

必ず記入する項目は、

- 名称……その資料の標準の名前と、その地域または家庭で呼ばれていた名前。
- 用途……使用者とその年代。使用目的と使用方法。
- 入手経路……その資料が購入されたのか、または自家製のものか。
- 形態・寸法……図などを描き、細かいサイズを記入する。
- 備考……気がついた点や、辞書などで調べたことを記入する。
- 入手年月日、談話者、入手方法、寄贈者

活用

ここでは、市民の方々より寄贈された民具がどのように活用されているかを紹介します。



①出前講座

写真は小学4年生が社会科の授業「昔のくらし」で歴史資料展示室を見学しているところです。展示室には明治から昭和にかけて実際に民家で使用されていた民具が展示されています。

昭和30年代まで純農村地帯だった大野城市には、農具がたくさん残されています。また、生活用具なども展示しています。児童はこれらの民具を学芸員の説明を聞きながら見学していきます。みんな初めて目にする昔の道具に興味津々です。電気も水道も無かった時代のくらしや道具から、先人の知恵と工夫を学びます。

出前講座ではこの他に民具が使われていた時代背景を学んだり、体験なども行います。



②ふれあい歴史体験

ガリ版

ガリ版は昭和 30 年代くらいまで使用されていた印刷機です。本当の名前を^{とうしゃいんさつ}謄写印刷といますが、使うときガリガリと音がすることからガリ版と呼ばれています。発明者は滋賀県出身の堀井新治朗・耕造親子です。彼らは、日々仕事において操作が簡単でより効率的な印刷機を作りたい、と思っていました。仕事を辞め、研究を重ね、エジソンの発明した印刷機「ミメオグラフ」にもヒントを得ながら、ついに 1 つの印刷機を作りました。親子はこれを「^{とうしゃばん}謄写版」と名づけ、明治 27 年（1894 年）に国産第 1 号として特許を取り、東京・神田に「堀井謄写堂」を建て謄写版を普及させていきました。しかし、平成 14 年に倒産してしまいました。現在、日本で謄写印刷を行っているのは、兵庫県明石市にある「アンドー、トーシャ」だけです。

下の写真は謄写版と必要な道具を紹介したものです。謄写版・インク・修正液・ろう原紙・ローラー・鉄筆・ヤスリ版などです。鉄筆には破線用や直線用など用途に応じて様々な種類がありました。また、謄写版のサイズにも B4 版や葉書サイズなどがありました。



ガリ版とその道具

字や絵をかくことをガリ切りとといいます。ガリ切りは、ヤスリ版の上に、薄い紙にろうを塗ったろう原紙を敷き、鉄筆でろう原紙に線を引きます。この時大切なことは、力の入れ方です。ガリ版は原紙にたくさんの穴を開けて印刷する孔版印刷^{こくはん}の一種なので、一定の力で書かなければ正しく穴が開かず、印刷がかすれてしまいます。下の写真はろう原紙にガリ切りしたのですが、白く線が引かれているのを見ることができます。この白い部分にインクがしみ込み、印刷したときに黒く字や絵となって現れます。隣のページの下の写真が印刷したのですが、ガリ切りがうまくいかなかったために、少しかすれてしまっています。謄写版で思い通りの字や絵がかかるようになるには、技術の習得が必要です。



ガリ切りの様子



ろう原紙にガリ切りしたもの

隣のページの上の写真は実際に印刷をしているところです。謄写版の一番下に用紙を置き、用紙の上に出来上がりを考えてろう原紙の位置を決めます。決まったら、網がついた枠を下ろして重ねます。網の上にインクをローラーで隙間なく伸ばします。インクが全体に行き渡ったら、試しに網の上でローラーを転がします。枠を一旦上げて、正しく印刷されているか確かめます。インクのつき方が悪いときは、数回試し刷りをし、最適な状態を選んで、ろう原紙がずれないように留め金でとめます。その後、必要な部数をすばやく印刷します。紙に均等に圧力をかけ、一枚刷るごとに枠を上げ、親指で紙をめ



印刷している様子



印刷したもの

くっていきます。

実際に体験した方からは、「ろう原紙を破らないように書くのが難しかった。」「自分が書きたいと思う字や絵が自分の手で印刷されるのはすごいと思った。」「自分が書いたものが印刷されるのでうれしかった。でも、難しいところもあった。」「印刷が終わった後も、服や手にインクがつかないように気をつけた。」「ガリガリって書く感触が楽しい。」「機械の印刷機が出る前って大変だったんですね。」などの感想がありました。

子どもの頃に使ったことがある人やまったくの初体験だった人など、参加者はさまざまでしたが、手作りの温かさが感じられたのではないのでしょうか。

今、ガリ版で印刷する人は日本ではほとんどいない状態ですが、東南アジアに渡って『トーシャバン』と呼ばれ、生活に欠かせない道具として活躍しています。

ちくおん き
蓄音機

蓄音機は録音する機械という意味です。明治10年（1877年）にトーマス・エジソンが^{よう}箔^{はく}円筒型蓄音機を発明しました。これは、蓄音機本体に内蔵されている直径8cmの錫箔を貼つた^{しんちゆう}真鍮の円筒に針で音溝を記録するものでした。

初めは電信や電話と同類の事務用機器としての需要が高く、口述記録と再生の機械として発展しました。その後、蓄音機は円筒型から円盤型へと変化していきます。円盤型とは平盤レコードをターンテーブルで回す蓄音機のことです。蓄音機の機能は記録より再生が重視されるようになります。そうして登場するのが再生専用の蓄音機です。これに伴い音が記録された円盤レコードが大量に作られ、色々な音楽を手軽に楽しめるようになりました。

下の写真はレコードを展示している様子です。レコードは規格によってSP盤やLP盤、EP盤と呼ばれたり、シュラックやバイナルといった材質で呼ばれたり、78回転、45回転、33回転、16回転など回転数で呼ばれたりします。展示ケースの下段左が蓄音機で使われるSP(Standard Playing)レコードです。材質がシュラックと呼ばれるもので、独特のスクラッチノイズがありました。また、非常にもろい材質だったために、落すと割れると言われていました。レコード針には鋼鉄製や竹製のものが使用され、一枚のレコードを聴くごとに交換していました。



レコード展示の様子



蓄音機

左上の写真はポータブル型の円盤型蓄音機です。レコードをかける時は、レコードをターンテーブルの上に置きゼンマイを巻いて回転させます。その時、針がレコードの音溝をたどって振動し、これが機械的に増幅され金属の振動板に伝わり音を再生します。

蓄音機を体験した人は、そのやさしい音色に感動していたようです。「電気を使わないのにこんなにいい音が出るんですね。」「音がまるやかなので、子どもに聞かせるのもいいです。」また、昔蓄音機を体験したことのある人からは「曲の終わりごとにゼンマイを回すから、レコードを聴く時はとても時間がかかりま



蓄音機の体験（レコードをきこう）

した。」「自分のSPレコードを蓄音機で聴けて嬉しかったです。久しぶりに聴いてみるとやはり良いですね。」などといった感想が聞かれました。

蓄音機はその後電気式蓄音機やレコードプレーヤーへと変化していきました。

いしうす
石臼

ここで使用している石臼は、市民から寄贈されたものではなく、体験用に購入した茶臼です。石臼は上臼と下臼を重ね合わせて、上臼を手動で回転させることで穀物こくもつを粉にする道具です。



上下の臼面には溝が彫っており、その交差により穀物は中心から円周方向へ、次第に細かくなりながら排出されるようになっています。粉が均一にできるためには、臼面の周辺部に数 cm ある接触面が平坦へいたんで滑らかであることが重要です。この調整が臼師の腕の見せ所でした。



石臼いしうすで黄粉きなこ作りに挑戦した子どもたちは、黄粉が大豆から出来ることや挽きたての黄粉が甘くないことを知りません。自分たちの手で挽いた出来立ての黄粉を一口なめてみて、おいしいと思ったり、まずいと思ったり感想は様々です。

石臼の体験

③平成 19 年度 民具展

さんめんきょう

三面鏡 (横幅 100cm、高さ 139.5cm、奥行 33.5cm)

化粧や服装など身だしなみを整えるときに使います。嫁入り道具のひとつです。三枚の鏡を組み合わせた三面鏡は、使わないときは閉じることができます。広く使われるようになったのは、昭和 30 年頃からです。

写真の三面鏡は昭和 20 年頃に購入したもので、姿見として使用していました。一面鏡では自分で仕立てた服が見つらいので三面鏡が便利だったそうです。



たんす
箆笥 (横幅 168cm、高さ 165.5cm、奥行 38.5cm)

箆笥は、戸棚や引き出しがついた収納具で、衣類や小物などを整理、保管するのに使用されました。嫁入り道具の一つです。

それまで使用されていた柳行李や長持などの蓋付きの箱にくらべて、引き出しは、整理がしやすく、出し入れが簡単で便利でした。明治時代になるとガラス戸や洋風の開き戸になったものなど、様々な種類が出てきました。

箆笥の材質には硬木の榿・桜・桂・桐などが多く使われています。その中でも、嫁入り道具として桐箆笥が人気となるのは幕末から明治以降といわれています。桐は特に軽くて湿気を防ぐので、衣類の収納などに向いています。



この箆笥は、寄贈者のお母さんが嫁入り道具として、大正14年～15年頃に購入したものです。83年もの間使用していましたが、非常に丈夫で金具もしっかりとついています。三段重ねになっていて、引き戸や大小の大きさの引出しや、扉の中に引出しがあるなど、それぞれの段に特徴があります。一段一段の横に持ち手の金具が取り付けられてあり、そこに棹きおを通し、担いで運んだと思われます。

飾り金具には、作られた土地の伝統や好みなどが表れるといわれますが、この箆笥の金具は非常に簡素なものです。

やなぎこうり
柳行李（横幅58.5cm、高さ18cm、奥行42cm）

昔の家の押し入れには行李が入れてあり、その中には衣類や下着など身の回りのものを収納していました。働きに出るなど家族とはなれて生活するときは、引越しの荷物を行李一つ分にまとめて持って出ました。背負って運んだりもしていたようです。また引越しの際、誰の持ち物かわかるように表に名前を書いたものもありました。

この写真の柳行李は、寄贈者のお母さんがハギレや反物、カスリなどを入れていました。



あしふ
足踏みミシン (横幅 99.2cm、高さ 120cm、奥行 41.5cm)

足踏み板を踏むと動くミシンです。はずみ車を回し、足踏み板を前後に踏むとベルトが回りだし、針が上下に動きます。使わないときは、ミシン本体が逆さまになり中に収納できます。

戦後は男性の働き口がなく、家計を助けるために内職する女性もいました。当時は女性が働けるところもなく、家事もあるため家でできる洋裁は非常に良い仕事でした。そのため、洋裁学校が次々にでき、しだいにミシンの需要も増えました。昭和 30 年代から 40 年代頃になると、電動式のミシンが使われるようになり、足踏み式のミシンにモーターを後付けする人も多かったです。

寄贈者が「今から 60 年頃前の義務教育は今で言う中学 2 年までだったので、両親は将来の心配をし、洋裁学校に通わせてくれました。しかし、洋裁学校に行っても数台のミシンしかなく、自分が作業できるまでの順番がなかなか回ってきませんでした。自宅で作業ができるようにと、お母さんがお姉さんと私に購入してくれました。それからは、自分で何でも作りました。結婚後も子どもの服を作ったり、オーバーを作ったりしました。このミシンを電動に変えなかった



のは、自分の好みの速さに調節でき、非常に使いやすかったからです。」と当時の思い出を語ってくれました。また、「革のベルトはかけたままにしておくと伸びてしまうので、使用しないときはベルトをレールから外しておきます。ベルトをはずすときは、レバーを倒すと楽に外れ、使うときは、手でレールの溝をなぞりベルトをはめ込みます。ベルトが切れたときは、針金でつなげば使うことができます。この方法はベルトを長くしたり、縮めたりするときにも使えるので便利でした。」と教えてくれました。また、「冬の寒い時期に作業をすると、足踏み板が冷たくなっているので、布を被せました。」と工夫を話されました。



針箱

さいほう
裁縫道具を入れる箱です。裁縫箱・ハリサシとも呼ばれます。箱の上部にはちょうつがい（ちょう）で半開きの蓋をつけています。下には引出しが数段あり、その中には針山やハサミ、糸巻など小物を入れています。



^{いこう}
衣桁 (開いた場合 横幅 149cm、高さ 151.5cm、厚さ 3cm)

衣類を掛ける道具のことで、「いこう」や「えこう」と呼ばれています。衣桁には、鳥居形・吊形・屏風形の三つの形態があります。この写真の衣桁は、屏風形です。屏風形の衣桁は折りたたみ式なので、部屋の角に合わせて立てて置くことができ便利でした。古くは江戸時代から使われていました。

この写真の衣桁は、寄贈者のお母さんが使っていたものです。「ゆこ」とよんでいました。



みだれかご

乱籠 (横幅 59cm、高さ 10cm、奥行 38.5cm)



着替えの衣類や帯などの小物を一時的に入れておく籠です。乱箱、衣装箱、乱盆とも呼ばれています。箆筒にしまわれないようすぐに着るものは、この籠の中に入れておきました。脱衣場で使用されることもあります。また泊まり客が来たときは、この籠に来客用の着替えをそろえておきました。

乱籠は衣桁の前に置いて使うこともありました。外出や部屋着に着替える際、脱いだ衣類を衣桁にかけておき、足袋や帯揚げなどの小物は乱籠に入れておきます。出かける前日には長襦袢ながじゆばんの襟えりと着物を重ねて、衣紋掛えもんかけにかけて準備しました。帯などを衣桁にかけておくと着替えが楽にでき

ました。また、家に帰ると着物を衣桁にかけて、風通しをしました。

写真の乱籠は、寄贈者のお母さんが就寝の際に衣類を入れておくのに使っていたものです。



ながじゅばん
長襦袢（縦 135.8cm、横 114.2cm）

着物を着るときに肌襦袢の上に着る下着のことです。長襦袢は下に着る肌襦袢の形を整え、着物を着やすくし、すっきりとした美しい線を出す役割をもっています。また、着物が汚れることを防ぎました。身丈は対丈で、袖は広袖、半衿をつけて着用します。ひとえ単長襦袢は夏に、あわせ袷長襦袢は袷長着の下に用いました。また、晴着の下につけるものには、もんはふたえ紋羽二重や不二絹・縮ちりめん綿などの絹で作られたものがありました。



たんぜん

丹前 (縦 141.2cm、横 129.4cm)

普通の着物より少し大きめで、綿を入れた広袖の衣服のことを指します。湯上りや防寒用に衣服の上に重ね着する綿入れの男性の家庭着です。普通、浴衣の上に重ねて着衣し、細帯を締めます。丹前はおもに関西での呼称で、関東では襦袍とてらと呼びます。



おわりに



現在大野城市教育委員会には、1400点にのぼる民具が寄贈されています。寄贈依頼の時に伺った話には、様々な思い出が詰まっており、そのどれもに愛着が感じられます。

今回紹介してきた民具は、寄贈者本人、またはその父親・母親が使っていたものです。それらの民具から、その人ならではの使い方や手入れの仕方が見えて、ただ道具として使われたのではなく、その人の生活と共にきたものとして、現在まで大切に保存されてきた想いが伝わります。

民具は人々の歴史を語る道具でもあります。

上の写真は平成19年度に行った民具展の展示風景です。道具の新旧を並べることで、その変遷が追えるように工夫しました。電気も水道もない時代に使われていた民具を見ると、自分の力で道具を動かしていたことがわかります。また、プラスチック製品などのなかった時代には、自然素材を最大限に利用していました。このような民具をこれからも大切に収集・保管し、展示室を訪れる人々が民具に触れる機会を増やしていきたいと思います。

参考文献

日本民具学会『日本民具辞典』（ぎょうせい 1997年）

小泉和子『昭和のくらし博物館』（河出書房新社 2000年）

岩井宏實『ちょっと昔の道具たち』（河出書房新社 2001年）

市橋芳則『キャラメルの値段 昭和30年代・10円玉で買えたもの』（河出書房新社 2002年）

小林克『昔のくらしの道具事典』（岩崎書店 2004年）

**大野城市の文化財
第40集**

2008年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印刷 大道印刷株式会社
福岡県春日市日の出町6丁目23番地

